筑前國武藏温泉

東方、歷歲千万、原泉彌長、養精鐲穢、疾疢廼忘、億兆一浴、壽考無疆、廼顧其側、神廟奕々、應皇陟降、於穆不敭、二神攸相、永護温液、其永維何、有密玉石、於昭先王、證陳國風、先民自古、其頌于隆、松侯受封、克敬神功、立石勒事、厥圖無窮、

〔温泉小言〕一筑前の國三笠の郡天拜山の麓に温泉あり、村の名を武藏といふ、その温泉まことに右の注文のごとく、異氣に觸ず、異臭異味を帶びず、自然天然のうぶのまゝなる湯の、たゞ硫黃の臭氣を帶て、あつからずぬるからず、身にふれて温柔和煦、既に浴して後、腹藏肌膚表裏内外煦々温暖の氣、やゝ、ゑばしやまず、頻に浴すれ共、肌膚枯燥せず、疥癬、梅瘡一切の諸瘡ある人これに浴すれば、皆邪毒を排出し、瘀汁を托發し、諸瘡ことの外わかやぎたちて、扨は九日乃至二七日三七日の以後、氣味よく平癒す、實に最上至極の良湯なり、それゆへ入湯の人も、近國よりあまたあり、されども温泉の理に達せざる人は、兎や角やと評論もつけ、有馬などの湯よりは格別おとりたる樣におもふべけれ共、左にはあらず、世人はたゞ耳を貴んで目をいやしみ、遠きをゑたひて、近きをゆるかせにす、これその常なり、淺間しといふべし、

一むかし釋の蓮禪、はる〳〵と此湯に湯治にくだりて、都へ歸りのぼるとて、長門の壇の浦にて、

夜憶遐鄉終入夢　晴望孤島小於拳　一尋西府温泉地　治病逗留及兩年

といふ詩を作りし由、無題詩集の中に見へたり、西府とは鎮西府の事にして、武藏の邊皆鎮西府の古跡なり、左すれば、此湯いにしへはことの外繁昌せし湯にて、近國のみならず、天下にひびく名湯にて、遠方よりも、はる〳〵と海山を越て湯治に來りし温泉と見へたり、又貝原翁の云、或説に、齊明天皇上座の郡朝倉の行宮にとゞまり玉ひし時、むさし村に行幸ありて、御湯治ありしと云といへり、又古今和歌集に、源のさねといへる女、都より筑紫湯治にくだりしに、かみなひの森にて、